

【第四一回大会講演】

アメリカ先住民の口頭伝承から「因幡の白兔」を再考する

—レヴィ＝ストロースによる分析—

川田 順造

レヴィ＝ストロース先生の「文化の三角測量」

因幡の白兔の挿話を問題にするのは、私の恩師であるクロード・レヴィ＝ストロース先生が、この話を取りあげ、アメリカ先住民の口頭伝承との比較で、興味深い議論を展開しておられるからだ。

レヴィ＝ストロース先生は、生前よく、私が研究方法としてきた「文化の三角測量」を引き合いにして、先生にとつての日本文化研究のための「ブンカノサンカクソクリヨウ」と、いつも日本語で発音なさっていた）は、かつて日本列島もその一部だったスンダランドの東南部にあたる現インドネシア西部と、日本列島と、一万五千年前までは陸続きだった今のペーリング海峡を通じて、東アジアからヒトがアメリカ大陸に移住して形成されたアメリカ先住民の伝承との比較だと仰つておられた。

先生による因幡の白兔の謎解きは、その三角測量が見事に実を結んだ一例だと言える。

内容に入る前に、「因幡の白兔」という用語について述べておかなければならない。周知のように、日本の文献での初出である『古事記』では、「稻羽之素兔」と表記されており、毛皮を剥がれているのだから「白兔」とすること自体おかしいとは、すでに多くの研究者に指摘されて来た。日本語では区別がないが、フランス語では語として区別される野兔 (lievre) と家兔 (lapin) も、レヴィ＝ストロース先生がテキストとして依拠された、全体として優れた訳であるドナルド・フィリピイの英訳では「毛皮を剥がれた」(naked) と、「家兔」(rabbit) (英語では「野兔」は hare) が混ぜ合わされているのは、どうしたことか。レヴィ＝ストロース先生歿後の二〇一四年に、『古事記』の全面的改訳としてコロンビア大学出版から刊行されたギュスターヴ・ヘルトの訳文では「毛皮を剥がれた野兔」(a naked hare) と、適切な訳語になっている。

ウサギの呼称との関連で、この論文の由来について手短に触れておきたい。創設に関わった広島市立大学国際学部が私が在職中、同じ学部に着任された神話学者篠田知和基さんが、編集出版する予定の『神話・象徴・文学』第二巻に、レヴィ・ストロース先生の寄稿をお願いして欲しいと言われ、手紙を差し上げたところ、丁度未発表の論文があると行って、折り返し送って下さったのが、この論文「Note sur les versions américaines de l'histoire du lièvre blanc d'Ihaha」因幡の白兔物語のアメリカ版についての覚書」だ。素晴らしい内容で、ただ『古事記』を読むのにレヴィ・ストロース先生が全面的に依拠されたフィリピの英訳からの引用に、フィリパイが英訳に用いた、それ自体は優れている古代日本語表記（オポクニヌシ、など現代の日本人には読みにくい表記）と、フィリパイが付けた参照番号が用いられていたのも、それを用いないことを了承していただいた。

篠田知和基編『神話・象徴・文学』第二巻は、二〇〇二年九月に、レヴィ・ストロース先生から送っていただいた論文を巻頭に載せて、篠田夫人が代表を務める名古屋市の楽浪書院から刊行された（私も同じ巻に「図象象徴性研究のための予備的覚え書き」を寄稿した）。

だがこの論文が、日本の読者に広く読まれたのは、私と和訳したレヴィ・ストロース先生の日本語を集めた『月の裏側…日本文化への視角』*L'Autre face de la lune: Écrits sur le Japon*,

Éditions du Seuil, Paris, 2011 に、篠田知和基編『神話・象徴・文学』第二巻から、そこに掲載されたままの「Le lièvre blanc d'Ihaha」因幡の白兔」という表題で、編者モーリス・オランダさんが採録してからだ（日本語版は中央公論新社刊、二〇一四年七月初版刊行以来四版、ブラジル向けのポルトガル語を始め、英語独語等、多くの言語に翻訳されている）。この本は、オランダさんの強い意向で、収録論文の表題の変更が禁じられているので、表記等については、訳者注の形で上記のような背景を述べるにとどめた。

以上のような但し書きを付けた上で、本稿でも「因幡の白兔」という呼称を、基本的に用いる。

レヴィ・ストロース先生の議論の大枠を、まず述べよう。因幡の白兔の話の起源地については、これまでさまざまに論じられてきたが、参考文献に挙げてある、一九八二年にドイツの日本学者クラウス・アントニが発表した、これまでのところ最も網羅的な比較研究『因幡の白兔…神話から童話へ』は、現在のインドネシア東部にあたる、スンダランド起源であることを示しており、レヴィ・ストロース先生の比較も、それを基礎にしている。

その上で先生は、一万五千年前以前、ベーリング地峡を経由してアメリカに渡った、日本列島人も含んでいたにちがいない東アジアの住民が、アメリカ先住民として、その後日本では消滅したか、他の多様な要素と結びついて変形された伝承の古い

形を、口頭伝承のなかにとどめていた可能性を探ってみようとなさる。そして、八世紀になってようやく文字化された『古事記』では意味が分からなくなってしまうた記述を、解釈し直すとうとする。『月の裏側』六八頁の言葉を引くと、「あたかも、古い墓のなかの骨が、もうつながってはいないが、互いに近いところにとどまっているおかげで、それらが一体をなしていたことがわかるように、オオクニヌシの神話の諸要素が互いに近接し合っていることは、アメリカ神話におけるように、それらが有機的に結び合わされていたことを示唆していると言えるのではないだろうか。」何と胸のすくように壮大な、レヴィ・ストロース流「文化の三角測量」ではないか。

「ワニ」の解釈をめぐる議論

レヴィ・ストロース流「文化の三角測量」に入る前に、ではこれまで日本人研究者は、どのように解釈して来たのかを、見とおそう。

『古事記』上巻に「和邇（此の二字は音を用ふよ）」と記されているものが、熱帯に棲息する大型爬虫類のワニであるかどうかについては、日本の『古事記』研究者は慎重だ。

岩波版「日本古典文学大系」1『古事記 祝詞』（一九五八）の校注者倉野憲司氏は、「鰐、海蛇、鰐鮫などの諸説があるが、海のワニとあることと、出雲や隠岐島の方言に鱧や鮫をワニと

言っていることを考え合わせて、鮫と解するのが穏やかであろう」と控えめな注を記している（九二頁、注三三三）。私も学生時代から島根県へはよく調査に行っているので、出雲でサメのことをワニと呼んでいることは知っている。

西郷信綱先生は畢生の大作全四巻の『古事記注釈』第一巻（平凡社、一九七五）では、「八俣のをろち」について「世界のあちこちの神話や民間文芸にしばしばあらわれてくるドラゴン——空想上の神秘的な怪物——の一種とみている。」（三六九頁）としている一方で、第二巻（平凡社、一九七五）の「古事記上巻の二」では、「爬虫類のワニではなく鱧や鮫の類だろうといわれる」と、控えめながら、出雲に棲息した実在の動物としての推測をしている。

その論拠として挙げているのは、『出雲風土記』（意宇郡）、『肥前風土記』（佐嘉郡）「此の川上に石神あり、名を世田姫といふ。海の神鰐魚を謂ふ年常にと、流れに逆らひて潜り上り、此の神の所に到るに、海の小魚多に相従ふ。或は人、その魚を畏めば殃なく、或は人、捕り食へば死ぬることあり。凡て此の魚等、二三日住まり、還りて海に入る」の記載と、『今昔物語』（巻第二三）の「鰐ノ、目ハ鏡」「刃の意」ノ様二見成テ、大口ヲ開テ、齒ハ鋌ノ如ク」だ（二三頁）。

この『今昔物語』の記述は、参河国の相摸宗平が、海の入江で、肩にかついだ鹿を「鰐」と争う話で、校注者小峯和明さんは、「宗平持タル鹿足ヲ鰐ノ口ニ入ル、マ、ニ、鰐ノ頭ノ鰐

二手ヲ指入テ」の部分の注で、「ワニザメ説では鰐をさすとみざるをえず、無理がある」とし（岩波「新日本古典文学大系」『今昔物語集』四、一九九四・三七二頁）、これに続く記述も、卷第二九第三一の、新羅で海に落ちた虎と「鰐」が戦う話に共通すること、「鰐ハ物ヲ噉テハ其二テハ不噉シテ、持行テ必ズ己ガ栖ニ置テ、其ノ残リ有ルヲ亦返テ噉ニ来ル也」という、卷第二三で続く記述にも、注二五で「ワニザメに住処があるかどうか疑問」としてワニザメ説には懐疑的だ。

これらの個所、「東洋文庫」版『今昔物語集四』（平凡社、一九六七）の訳者永積安明・池上洵一両氏は、注三八で「獐猛な鮫の類。ワニザメ」（八二頁）と、あつさり断定している。

他方、卷第二九第三一の、新羅で海に落ちた虎と「鰐」が戦う話、および、卷第三二第一七の、常陸国の海岸に流れ着いた死人の頭、右手、左足がないのは、「鰐」などが食い切ったのであろうという記述の部分の校注者森正人氏は、どちらについても、「ワニザメが相当するか」とし、「鰐は漢籍、仏典等に出るが当てられる動物は多様」と述べ、「本集の本朝世俗部の登場例（卷第二三第三二、卷第三一第一）によれば、海に棲む大型で獐猛な魚類」（岩波「新日本古典文学大系」『今昔物語集』五、一九九六・三六六頁）と、小峯説とは異なる解釈を、だが小峯説ほど説得力のある根拠は示さずに、述べている。

この個所、「東洋文庫」版『今昔物語集六』（平凡社、一九六八）の訳者永積・池上両氏は、「鰐 わにざめ。猛悪な

鮫の類をいう」（注九一、一二五頁と、前記の注と同様、簡潔に断定している。卷第三一第一七の常陸の浜に打ち上げられた巨人の、右手、左足がないのは、鰐などが食い切ったものであろうという記述（三七頁）については、「鰐」に注をつけていない。

だが逆に、スندگانランド以来、日本人の先祖には馴染みの深かったはずのワニを、出雲人が直接見たことはなくとも、知識としては知っていたから、サメをワニと呼ぶ習慣も生まれたと見る解釈も、十分に成り立つだろう。

『古事記』より三〇〇年前に書かれ、『古事記』や万葉歌にも影響を与えたとされる中国の『搜神記』（東洋文庫10、千宝著、竹田晃訳、一九六四）は、日本でも広く読まれたが、明の万暦年間（一六〇一―一七世紀）に編まれた現存本卷二、四二「扶南王」にも、メコン川下流域に一七世紀に栄えた扶南の王范尋が鰐を一〇匹飼っていて、罪を犯した者があると鰐に投げあたえ、鰐が食わなければ、ゆるすことにしていたという話が載っている（東洋文庫版・四一―四二頁）。

私見では、日本に一三世紀末の正応年間からある、寺院・神社の拜殿で鳴らす音具が「鰐口」と呼ばれていることも、大型爬虫類としてのワニを、日本人が直接見たことはなくとも知っていた証拠の一つと言えるのではないだろうか。

アメリカ先住民に学ぶ『古事記』の謎解き

レヴィーストロー先生が挙げている、アメリカ先住民の伝承から、『古事記』の解釈に新しい光が投げかけられる例を、いくつか挙げて見よう。

「因幡の白兔」の物語には、南アメリカ先住民の伝えているものが、きわめて近い。敵対者に追われている主人公（時として女性）が、南米産のワニ、カイマンに、川を渡してくれと頼む。ワニは承諾するが、心のなかで悪事をたくらんでいる。ワニは主人公に、自分を侮辱するようにさせる（呑み込んでしまうのに、都合のよい口実だ）、あるいは侮辱したといって責める、もしくは、無事に到着した主人公は、ワニから逃れられると思って、実際に侮辱した主人公は、ワニから逃れられるかないかのうちに、ワニをあざ笑って騙していたことを明かすという、日本で知られている類話に最も近い。

北アメリカには、はるかにスケールの大きい伝承が存在する。そして、因幡の白兔の物語が冒頭をなしている、一連のオオクニヌシノミコトをめぐる物語、オオクニヌシと兄弟との恋争い、オオクニヌシが課せられる危険な刑とそれからの脱出なども含む物語に示唆を与える伝承が、詳細に語られている。

ミズーリ川上流地域に定住し、トウモロコシの栽培と、野牛の狩りで生活していたマンダン族の、ある大神話のなかにこの

挿話がある。

二人の兄弟が、さまざまな冒険を経たあと、トウモロコシの母である農耕神のもとにたどり着く。二人はこの神のもとで一年過ごしたあと、彼らの村に戻ろうとする。一筋の川が、ゆく手をはばむ。彼らは角の生えたヘビの背に乗って川を渡るが、ヘビの力を保つために食べ物を与えなければならぬ。さもないければ皆、溺れ死ぬ恐れがあるとヘビが言う。対岸にたどりついたとき、兄弟が土手に跳び上がると、ヘビは兄弟の一人を呑み込んでしまう。残った一人は、そこに居合わせたライチョウの勧めに従って、まがいものの食物を与えて、うまく呑み込まれた兄弟を助ける。ライチョウはその天の住みかに二人の兄弟を連れて行き、兄弟はそこで、ありとあらゆる武功を立てる。一年経つと、ライチョウたちは兄弟を彼らの村に連れ戻し、そこで毎年秋に、ライチョウを敬う祭をおこなうように命じた。

二つの点に注目すべきだ。まず、この神話は、三つのくだりから成り立っていることが分かる。第一のくだりは、農耕神のもとでの地上の滞在、第三のくだりでは、戦の神のもとでの天上の滞在が語られる。第二のくだりは、滞在でなく旅であり、水の上で展開する。

二つ目の点は、主人公たちの行動に関わるものである。農耕の神のもとでは、二人の兄弟は節度をもって振る舞わなければならない。狩りをするのは許されているが、こっそり、少しだけしかやってはならない。

一方、ライチョウの所では、彼らの行動は度外れなことが特徴だ。ほどほどにせよという、再三の忠告に耳を貸さず、彼らは怪物に立ち向かい、殺す。水は天と地の中間をなす要素であるから、水棲の蛇に対する二人の兄弟の行動もまた、節度と度外れの中間にあり、取引したり、騙したり、嘘の約束をしたりする。

このどっちつかずの振る舞いは、アメリカの神話においては論理的に必然の結果となっており、他の二つの行動から推測できる。そしてこれは、ワニに対する因幡の白兔の振る舞いでもある。意味のない些細な要素と思われるかもしれないが、アメリカの例では、全体のなかに統合されており、そのなかで意味づけをもっている。

『古事記』のなかで、因幡の白兔の話は「オオクニヌシノミコト武勲詩」とでも言える物語の、冒頭の挿話だ。そのあとの挿話で語られるのは、オオクニヌシとその兄弟たちとの恋争いで、これに敗れた兄弟たちは、仕返しに、死に至るような試練をオオクニヌシに課する。試練の一つは、特に注目に値する。兄弟たちは一本の木を切り倒し、斧で幹を裂き、楔を打ち込んで縁を開く。そして弟を隙間に入らせて楔を抜き、幹が閉じて弟がつぶされるようにするのである。

ところで、他に類を見ないこのモチーフは、甥または婿を亡き者にしようとする伯（叔）父や義父が登場する、アメリカ先住民の神話に典型的なものである。

神話学者ステイス・トンブソンが「楔の試練」"wedge test"と名付けたこの型の神話は、三〇ほど採録されているが、アラスカ山脈とロッキー山脈の西側の地域に集中していることは、注目に値する。オセアニアと、日本と、アメリカのこの地域にある、この型の神話について、もう一世紀以上前に、人類学者フランツ・ボアズは、その起源がアジアの末端にあるという結論に達した。「楔の試練」についても、他の結論は考えにくい。

オオクニヌシは、兄たちの言いなりにされていたが、兄たちもオオクニヌシも求婚していた王女の好意を勝ち取る。このオオクニヌシと兄たちとの戦いは、多少の変形はあるものの、世界の神話のいたるところに見られる。そのため、普通に考えれば、この物語に特別な意味があるとすべきではない。しかし『古事記』では、気位の高い渡し手が登場し、主人公がこの渡し手と取引をしたり、騙したりして、助けてもらうという挿話が、この物語と結びついている。嫉妬深い親族（一人もしくは数人）が出て来るアメリカの神話でも、同様の結びつきが見られる。

つまり、こう考えた方がよいだろう。これらの異伝は同じ一つの物語に、いくつかのモチーフの基礎を置いている。これらのモチーフは、日本では、単に近接しているだけの物語に使われている。例えばアメリカの神話で、兄嫁から濡れ衣を着せられた主人公が、湖のなかの無人島に置き去りにされる。彼は、水獣の力を借りて、陸地に送り届けてもらう。つま

り、『古事記』ではつながらない（登場人物が同じでない）ように思われ、そのためにあれこれと模索がされたこの結びつきは、アメリカの神話のなかで、その動機が明らかにされているのである。

次に、オオクニヌシの武勲詩に続く、スサノオノミコトのもとで起こる挿話に移ろう。スサノオノミコトは、アメリカの神話でびつたり対応する神がおり、トンブソンの分類名では「邪な義父」^{よこしま} "evil father-in-law" と呼ばれる神話に登場する。最も広く知られている類話では、しばしば社会的に不遇か、奇蹟的な生れ方をした若い主人公が、太陽の娘と結婚するために天界に昇る。スサノオは確かに太陽に関わる神格ではないが、スサノオが自らのために選んだ滞在先や、オオクニヌシが赴く場所は、疑いもなく「別界」の性格を示している。いずれにせよ、日本でもアメリカでも、主人公は目的の場にたどり着き、その別界を支配する者の娘に出会う。娘は彼との恋に陥り、父親のところ连接到て行く。父親は結婚に同意するが、生き残れないような試練に遭わせて、婿を亡き者にしようとする。日本でもアメリカでも、主人公は父親に抗して夫の味方をする若い妻の呪力のおかげで、死を免れるのである。

アメリカ先住民に学ぶ『古事記』の謎解き（つづき）

日本と異なってアメリカでは、この一連の神話のなかに「渡

し手」の挿話が、動機づけられた位置を与えられている。だが、そのことを示すためには、説明が要る。

北アメリカの神話では、渡し手はワニ（この地域での呼び名は「アリゲーター」だが）であったり、ツルであったりする。ワニは一方の岸から、他方の岸へと移動する。ツルは、それを呼ぶ者の反対側の岸にいて、脚の一本を歩道橋のように伸ばす。そして渡して欲しいと頼む者に、讃辞か贈り物を要求する。ツルが同意した場合には、自分の膝は脆いので、膝に当たらないようにと前もって教える。讃辞か贈り物を受け入れない場合、ツルは何も言わず、膝は衝撃を受けたかのように折れ、渡してもらっている者は水に落ちるのである。

ワニが、良からぬたくらみと見返りの要求のために、渡し手として半分の働きしかないように、ツルも頼んだ者の一部しか渡さない。ツルはいわば半導体の役割を演じる。ある種の客は全く安全に運ぶが、他の者は運ぶのを中断し、溺れさせるのだ。

現在のワシントン州の太平洋岸に住む、サリッシュ語を話す先住民の神話の一つに、二人（数人の場合もある）の兄弟の末弟が、多くの愚行を演じる物語がある。不用心にも夕食に招いてしまった一匹の鬼に追われて、主人公は、とある川の岸にたどり着き、対岸に見つけたツルを呼ぶ。このツルは雷神で、主人公は助けてもらうために過酷な取引をしなければならぬ。雷神は結局、川を渡してやることに同意し、彼をもてなし、彼

と結婚させるべく娘を与える。その上で、雷神は主人公がまちがいなく死ぬようなくつかの試練を課するのだが、その第一に「楔の試練」がある。そして主人公は、妻のおかげでそれを乗り越える。

このようにして、「渡し手」と「邪な義父」は、『古事記』では隔たった場所で、別のキャラクターとして登場するのだが、アメリカの神話では、同一の人物になりうるのだ。

オオクニヌシの神話と、それと比較したアメリカ先住民の神話が、どの点で似通い、あるいは異なっているかがわかる。ここかしこに、同じモチーフあるいは主題の融合が認められる——気位の高い渡し手、嫉妬深い近親者、邪悪な義父、裂かれた木の幹の試練（そしておそらく良い忠告者としてのネズミ）。しかし、これらのモチーフあるいは主題を、日本の神話は並列しているのに対し、アメリカ先住民の神話は一つの物語に構成している。オオクニヌシの神話の諸要素が互いに近接し合っていることは、アメリカ神話におけるように、それらが有機的に結び合わされていたことを示唆していると言えるのではないだろうか。

そこから、結論として何が言えるだろうか。アジアの大陸部に起源をもつと思われる——その痕跡を探さなければならぬが——神話の一体系が、まず日本に、次いでアメリカに渡ったことを、すべてが示しているようである。その体系は、八世紀に文字化された日本の神話では互いにつながりはないが、物語のな

かでは隣接し合っているさまざまな要素によって、見当をつけることが可能だ。アメリカでは、おそらく遅れて伝わったために、要素間の結びつきがより認められやすい。このような仮説を立てば、『古事記』に因幡の白兔の物語があることは、偶然ではない。それに先立つ、あるいはそれに続く挿話と関係がないように見えるにせよ、この物語はそれなりに一つの神話体系に統合されていることを示しているのではないか。その神話体系のアメリカの事例は、一つのアイデアを生むことを可能にしてくれる。

終わりに、一言述べておきたい。レヴィ・ストロース先生には残念ながら生前お伝えできなかったが、日本口承文芸学会の会員でもある小島瓊禮よしゆきさんは、「因幡の白兔」の東南アジア起源を早くから主張していただけでなく、前記クラウス・アントニは僅か一論文を参照しているに過ぎない、ギリヤーク語の研究者でもあった高名な東洋学者高橋盛孝博士のいくつもの著作のほか、アントニは全く参照していない、東北アジアの民話や物質文化の研究者として多くの著書を世に送った山本祐弘氏の数々の研究にも依拠して、シベリア東端カムチャッカ半島のギリヤーク人、コリヤーク人の間でも、狐がアザラシを騙して数をかぞえながら海を渡る物語が伝えられているほか、焼け石を傷に差し込んで熊を焼き殺すコリヤークの話も、妻争いで兄たちが焼け石でオオクニヌシを殺す『古事記』の物語に対応することを、一九六五年に専任教諭として教鞭を取っておられた國

學院大學久我山高高等学校の『紀要』第三輯（九八―一二三頁）で詳細に論じておられる。これは、レヴィ・ストロース先生の「文化の三角測量」は知らずに書かれた論文だが、この「三角測量」の妥当性を補強する貴重な貢献だ。このように先駆的な研究をなさった小島さんが、私たち日本口承文芸学会の古くからの会員であることを、誇りに思うことをつけ加えて、私の拙い話を終わる。

日本文化への視角』、中央公論新社、二〇一四年初版、二〇一六年第四版（後の版の方が、訳者注が行き届いている）。

（かわだ・じゅんぞう／神奈川大学特別招聘教授・日本常民文化研究所客員研究員）

主要参考文献（順不同）

Klaus J. ANTONI *Der Weisse Hase von Inaba: Von Mythos zum Märchen Analyse eines Japanischen "Mythos der Ewigen Wiederkehr" vor dem Hintergrund Alchinesischen und Zirkumpazifischen Denkens*, Münchener Ostasiatische Studien Band 28, Franz Steiner Verlag GMBH Wiesbaden, 1982. (東京都港区赤坂のドイツ文化会館図書室でも閲覧可能)

西郷信綱『古事記注釈』第一巻、第二巻、一九七五年、東京、平凡社。

Kojiki : Translated with an introduction and notes by Donald L. PHILLIPS, University of Tokyo Press, Tokyo, 1968.

The Kojiki: an account of ancient matters. [compiled by] O no Yasumaro: translated by Gustav HEDDT, Columbia University Press, New York, 2014.

クロード・レヴィ・ストロース（川田順造訳）『月の裏側…